

文化中国の帰属意識生む

て、人が移動することについて、三つのポイントが見えてきた。

「信頼」を築く

第一は、「信頼」のネットワークの伸張が極めて大事であったこと。事業の展開では、同じ言語や同郷性を通じた信頼関係が必要であった。中国語の習得を通して、それぞれにとつての

語圏の文化的伝統を一部共有するタイの潮州系財閥が安定株主であった。資産の上方への蓄積に価値があるのではなく、むしろ水平に展開する「信頼」のネットワークの伸張が重要であった。

第二は、いくつかのネット

トワークのなかで、とくに広東系のそれは、明らかに十九世紀からのイギリスによる香港の割譲とかかわっていたこと。植民地の香港は、アジアの中継港として近代的な汽船が寄港しており、そこには船の錆とめな

れていた。その技術を習得して、塗装業を横浜や神戸で展開したのが、華僑・華人層であった。梁建宏さん(宝安、神戸華僑三世)の家業は、その代表。ネットワークはイギリス帝国に張り付いて伸張したのであった。

「下からの領事館」

グローバル化の時代といわれるが、日本社会はまだ人が移動することについて、やや消極的な認識を持っているように思える。前近代の封建制度のもとで、人の移動が強く制限された強固な身分制の経験と関係しているのではない。他方、封建制があまり展開しなかった中国では、人々の移動は容易であり、農民が商人になることも可能であり、自由な市場が広がった。そうした自由な市場を海外にまで広げたのが、いわゆる華僑・華人らであった。



神戸で開かれた公開シンポジウムでディスカッションする華僑・華人三世・四世の参加者たち

人が移動すること

籠谷 直人

存在大きいネットワーク

「国家の時代」のあとには、再び「帝国の時代」が来るのだろうか。籠谷さんは、主権国家が成立する以前の近世アジアにさかのぼり、日本から中国、

インドにまたがり繰り広げられた経済活動や通商の仕組みを研究。「帝国とネットワーク」の共同研究を立ち上げている。

この秋に、「華僑・華人ネットワークの新时代」と題した公開シンポジウムを神戸の中華会館で開き、華僑・華人の三世・四世の方々、六人に参加いただき、

日本に移動した家族の歴史や、現在の事業の展開について報告いただいた。このシンポジウムを通し



かたに・なおと氏 1959年京都府生まれ。著書に「アジア国際通商秩序と近代日本」など。

宇治市の出身。アジア経済史への関心は、近くにあった黄檗山万福寺から芽生えた。江戸時代に中国から渡来した徳元が建立した中国風の寺院だが、中国文化とともに豆などの産物もたらされた。華人ネットワークの存在は、明治期以降も大きかったとみる。「幕末の開港は、欧米列強の外圧が強調されるが、アジアに向けた開港でもあった」。二十一世紀になり、アジアへのまなざしが強まる今、連続と続いてきたアジア地域間の通商の歴史に光をあてる。

を促す癒しの場所であった。曹英生(寧波、神戸華僑三世)さんの神戸の豚まん店南京町老祥記や、陳優継(福清・長崎華僑四世)さんの長崎チャンポン四海楼は、「下からの領事館」という側面をもっていた。華僑・華人が移動を可能にした背景には、こうしたシステムが存在していたのである。

世界でテロが横行する昨今、ますます海外への移動は危険を伴うものである。しかし、移動を通じた人類史の発展を、日本社会が認識することも必要であろう。(京都大学人文科学研究所助教)